

---

# 本音・建前・妥協と恋愛

三つ木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本音・建前・妥協と恋愛

### 【Nコード】

N4032BA

### 【作者名】

三つ木

### 【あらすじ】

学校というコミュニティの中、閉じた輪の中で起こるもろもろ。友達という束縛、恋愛という勘違い、変人である対価、周りと違う恐怖、価値観がちがう意味、それらを乗り越え、又は粉碎し、妥協し、迎合し、目的地を決めながらもこっちへフラフラ、あっちへフラフラ、時に目的地すら妥協しながら進んでいくお話。

だったらいいね。

## 第1話 ある日の前（前書き）

はじめまして。はじめて書くのでみなさん全員はじめましてで間違いないはずです。

はじめて書きます、今までこんな風に書く遊びすらしたことない人間です。この話は自分の衝動で書いています。なので「あつ、こんな考えのキャラいたな」とか「しゃべり方が何となく似てる・・・」とかがあるかもしれません。

なのでこれはダメだと思ったら感想なりで言って頂いてかまいません。っていうか言ってくださいお願いします。

## 第1話 ある日の前

「・・・・・・・・わかんねえよ」

「・・・・・・・・わかるわけねえだろ」

「・・・・・・・・例ええ！それがあ！自分自身のことだろうがああ！幾ら考えようがわからねえんだよおおお！！！！なの！！！！他人の事？んなもんわかるわけねえだろうがああああああ！！！！！！！！！！」

「・・・・・・・・だから俺は、他人の事なんて考えねえ。そんな他人のつまらねえ事情に、一々拘ってやるつもりなんざ」

「・・・・・・・・ねえんだからよおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

これは本音。正真正銘間違はなく本音だ。ブチ切れて溢れ出た本音の発露。

流れ出たものはもう戻らない。ただ広がっていくのみ。

覆水盆に返らず。

ベシッ

・・・痛い。

ああ、痛いな。なんだこれは。後頭部を衝撃が襲った。

瞑っていた目を開けると暗闇だった。うつすらと入ってくる光を頼りに眼球を動かし周りを見ると、何か大きいものがすぐ目の前にあることが分かる。

これはなんですか？これは机です。

・・・あまりの熟睡っぷりに、ついつい英語の教科書みたいな問答が出てきたようだ。ああ、ならさっき俺の後頭部を襲った衝撃は・・・

「お前、さっきの授業でも寝てたろう。どんだけ寝れば満足するんだ？」

ん？先生はなにやら酷い誤解をしているようだ。間違いは間違いと素直に教えてあげるのもまた、生徒の役割だろう。

体を起こし、口を開き、聞くに堪えない言い訳がこぼれ出る。

「いやそれは違いますよ先生。むしろ逆です、俺は極力眠りたくないんです。だって、もったいなくないですか？眠っていたら何も分からない、前後不覚とかそんなレベルじゃなくて、なにも感じることもないなんて、もったいない。」

「いやいや寝てたじゃん。熟睡だったじゃん。しかも二時間ぶっ続けで」

「それはあれですよ、三時四時くらいまで起きてると昼間に眠気が・  
・ね」

「結局寝てたら同じだろうが。まあ、二時間分は充眠？したんだから、あとの時間ぐらいいは起きてるよ」

加藤先生が教壇のほうへ歩いていく、もう一人寝ていたやつがいたらしく、そいつも行きがけの駄賃とばかりに教科書で覚醒させられていた。

「いつも思っんだが、このご時勢に、軽いとはいえ暴力を振るう教師ってのもすごいよな」

「たしかに」

「しかも男女問わずだぜ、男女平等とかいってる世の中だけどなかでできないよ」

「たしかに」

「まあ俺の隣には授業中に三時間寝続けたっつー猛者もおられるみたいだが」

「マジでか！二時間の睡眠しか出来なかった俺なんかまだまだ……  
つてことなのかな」

「……………」

「スイマセン、はい私です」

弱いなー俺。はい、本当は三時間も惰眠を貪っておりました。  
ちなみに話しかけてきたのは隣の席の捨鉢活機君、十六歳。八坂高  
校2年C組、主席番号・・・はわからないがなんとサッカー部のエ  
ース

の良き相棒だ。つまりエースほどの上手さはないけど他の部員より  
は上手く、エース君（仮）と現時点で1番上手く合わせられると、  
そういうわけで。

「お前、沈黙のプレッシャー？に弱いなあ。いつもながら」

「あの間がだめなんだよ。あの間が俺の良心を責めたてるんだよ」

「んなもんあんなのか？」

「はい、あります。すっげーのが。特注品のオーダーメイドが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「スイマセン、ありません、欠片も、微塵たりともございません。  
あと言葉の意味が被ってしまいました。もうしわけございません」

「オホン、話を戻すけど三時四時まで起きてなにしてんだ？」

「んーなんもしてない」

「は？」

「いやだから、特別起きてなんかしてるってんじゃないくて、もう何  
度も読んだ本を読み直したり、深夜ドラマを見たり、ああたまにテ  
レビショッピングも見たりと脈絡なく目的もないのさ」

「いやいやいやいや、んー、ふーん、はー、そうかそうか、なるほ  
どな。2年になって、隣の席になって、喋って、知り合って、まだ  
1ヶ月も経ってないが……間違いないと断言できるよ。」

「お前は変人だ」

「知ってるよ。多分……」



## 第2話 ある日（前書き）

さあさあどこまで続くのか私にもわかりません

## 第2話 ある日

今日は素晴らしい日だ。ああそうだと途轍もなくすばらしい。休みだ、休日だ、自由だ、パラダイスだ。

しかも今日はゴールデンウィーク初日！明日も明後日もそのまた次の日まで自由が保障されている。まあそのさらに次の日はバイトがあることが保障されているのだが。

捨鉢のやつなんかは「昼まで寝倒すに決まってるだろーが！！」とほざいていらつしゃったが。もったいない。

第1話でも言ってたと思うが俺は寝るのが嫌いだ。ああもつたいない、なにか出来るだろうその間で。なにかを読めるだろう、見れるだろう、感じれるだろう、自慰に浸ったっていいだろう。意味あることをする必要はない、形に残るものを作る必要もない、勉強しろなどと口が裂けても言いはしない。寝るということがただただ無為に感じてしまうという、本当にそれだけの話だ。寝るなんてそれは死んでると同じだ。まあ「疲れがとれたり、精神的にも安らぐし、生きるのに不可欠なのだからむしろ、一番生きてるといえるんじゃないか」と反論されればいともたやすくこの口は閉口してしまうが。

・・・喋ってはないからな。この閉口はなんていうかナレーションみたいなもんだから。脳内で垂れ流しているド恥ずかしい妄想の一種みたいなもんだからね。だから俺は街中で一人で空に向かって話しかけている不審者ではないのであしからず。まあ街中でこんな妄想をしているのだとしたら、それはそれで十分不審者の素質があるんだろう。・・・周りから見分けるかは別問題だが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

チラッ

悩みはじめてもうも45分も経っている。そろそろ決めないとな・  
・

今いるのはナレーションでも言ってた通り街中、さらに詳しく表現  
すると店の中、さらに詳しく・・しつこい？スイマセン、家具を  
買いに来ています。もったいぶってすいません。

家具・・そう枕を買いに来ている。家の近所には小さくてしょっ  
ぱい感じの店しかなく俺の購入欲を刺激しなかった。が、羽毛が飛  
び始めている枕をつかうのも限界だったようで、朝起きたら羽毛に  
埋もれていた（誇張表現あり）

てなわけで購入のため電車に乗って大型家具店へ馳せ参じたしだい  
でございます。

正直舐めてたわ、枕を舐めてました。シーツの柄や肌触りはまあ分  
かってたとはいえ問題は中身、羽毛だのポリエチレン、ポリエステ  
ルさらには2種混合とかまである。そりゃ時間がかかるさ、悩みに  
悩むさ。とはいえさすがに店員の視線が気になってきた。いやたぶ  
ん、迷惑だとか不審なやつだなとか思ってたないんだろうが思ってる  
のかなと想像する・・・でも思ってたないかもしれないし・・・

まっどうでもいいか。

さらに30分後枕とシーツを購入し俺は店を出た。

予定より時間を使ってしまったため午後の2時になってしまった。昼飯もまだだ。でも・・・大丈夫だ、問題ない。なぜなら自由だからだ。今日この日24時間は俺の自由だ、俺が俺のために使える俺の時間だ。だから昼飯が2時になるうが3時になるうが俺が問題ないとは判断すればそれは問題ないのだ。なぜなら自由だから！！！！！！ビバ自由！！！！！！（ビバの用法あつてんのか？まあいいか）

というわけで駅の近くにあるM印のファーストフードへ今向かっているところだ。この駅は結構でかい駅で、周りにもショッピング街が立ち並んでおりゴールデンウィーク初日ということもあつてか結構な賑わいを見せていた。

それらのショップを横目に見ながら目的地へと俺は進んでいた。冷やかしたいという気持ちもあるにはあるのだが、いかんせんこの枕君が邪魔だ。歩くのにもすでに邪魔だし、こんなもんもってあの人ごみに行きたいとはとてもじゃないが思えなかった。

M印は生憎と満席だったため持ち帰りにしてもらい、公園で食べるために移動中だ・・・なんかさっきから移動中が多いな。まあ俺がM印の中でレジの順番待ちたり、注文したりを描写してもシュールに過ぎるだろうが。なんとなく今ハシウルストレミングやって単語が浮かんだ・・・なんだっけ？

M印を食べ終わり、まだ残っていたジュースをズーコーやりつつ歩いているとなにやら空気が変だ。ガヤガヤと見物人たちが何事かを囁きあっており、ちよつと悩んだが、なんとはなしに覗いてみることにした。

この判断が所謂ターニングポイントとやらなのだろう。俺は無神論者で「神も仏も蹴っ飛ばせ」を地でいっているため縁のない言葉なのだが、正にこついつのを、阿呆どもが口をそろえて言うのだろう。……運命と。

男が5人いた。

女が1人いた。

男5人が女を囲んでいた。

つまり……女が性が悪い男に絡まれている。

「チエ、つまんねえな」

ありがちだ。どこかのマンガ・ドラマ・小説でよく見る展開だ。

新鮮味がない。面白みがない。緊張感がない。

なんかこう酔っ払いがあわや転落死?!とか、「助けて下さい!」と世界の中心で愛を叫ぶ?!とかそんなわくわくさせるシュチュエーションを期待したのに・・・これか。まあ両方とも不謹慎極まりないが。

でもこれは真理ではないだろうか?面白いものが見たいという欲求はとどのつまり刺激がほしいということではないだろうか。その刺激が赤ん坊のほほえましい姿が映っているホームビデオなのか、人の死という禁忌に関する事柄なのか。結局はこの違いではないのかそこに苦い・辛い・甘い・甘いと個人の趣味趣向が入り混じるが大別すると、+と-の2極になるのでは?

ただ死は怖い恐ろしい。俺だってもちろん怖い。でもだからこそ刺激としては最高級の質を持っているのではないのか?

問題なのは-の刺激でも楽しめるかどうか、自分の糧に出来るのかという点だろう。

これは酒だ。酒と同じだ。アルコールを摂取し楽しめるか否か、これに似ている。俺は飲めない、飲むとしんどくなって動かなくなる。あと目が据わって怖いとも言われた。こういう人は酒を飲んでも楽しめない。それと同じだ。

- 刺激に対する耐性を持たないものからすれば不謹慎など百害あって一利なし、なんだろうが不謹慎な事柄が無くならないのは- 刺激の耐性を持つものも少なからずいるという証明ではないだろうか。

- の刺激に対して気持ちよく酔えるか？乗れるか？それはおそらく  
素質・環境・慣れで増減するのだろう。  
まるでアルコールと同じだ。

まあ、本筋の流れとはまっつっつっつっつた関係ないが。ただ  
の駄文だ。

今回の騒動、まあえて見所を上げるとするなら。現実なんていう  
世知辛い所にも、窮地に駆けつけてくれる王子様なんているのか？  
ってとこかな。

よくよく男たちを見てみると・・・全員17くらいか？正直見た  
目で歳なんかわかんねえよ。厳ついし。まあ高校生なんだろうなっ  
てことはわかる・・・なんとなくだが。

女のほうは・・・

「おおーマジでめっちゃキレーな子じゃんか」

あつ、男1人追加入りました！  
1対6か厳しいな。ブチのめすなら王子様3人もしくは武術の達人

王子がいるなあ。・・・なんかハン　チ王子みたいだな。

で、女のほうは・・・あれはウチの高校のヤツだ！！しかも知ってるヤツだ！！！！

とはいえこつちから一方的に知っているだけだが。どえりゃー美人で入学当初から色々話題になった。おれもあの子の教室まで顔を見に行つたから覚えていて。クールぶっているバイトの先輩と捨鉢の3人で見に行つたっけか。かわいいよりは美人さんだったな。だ  
いぶ俺たちの話のネタにもなったな。2年になつて髪型を変えて人気が再燃したあの・・・あの・・・あ・・・名前まで知つてるとは言つてないだろ。

見に行つただけだったし。見たかつたと、知り合いになりたかつたは全然違つ。まあどちらも、あちらさんの迷惑であることは想像に難くなかつたが。

ジロジロとだいぶ不躰な感じで女を・・・女の子を見ていたが、ふと目が合つた。困惑した顔というよりも無表情で従わない、言うことなんぞ聞いてたまるかという意味が言葉なくとも伝わってきた。

ああ、なるほどなと得心が行つた。なんで男が1人追加発注されたのかわからなかつたがそういうことか。

5人でダメならもつと増やせばいいじゃない。

と、まあそういうことなのだろう。頭悪いし、女の子1人に対して情けねえなとも思つたが、あの無表情を前にすると応援を呼びたくなるのも理解できなくもない。美人だからか迫力がすごい。まあだからといって情けないのはどうしようもないが。



ただ、これは効果的だろう。5人ならまだ視界は開けているだろうが8や9人きたらこれはもうどうしようもない。視界が奪われれば恐怖は一気に倍加しそうな気がする。されたことないから想像だが。単純に逃げにくくもなるしね。

ん？美人Aがこっちを見続けてるような・・・フウ・・・..  
しかたないな

(ガ・ン・バ・レ) b

ナイス応援だ俺！ナイスサムズアップ！！

いやー、つまんなかったから、ついからかつちゃった！  
そろそろ帰るか。潮時だ。

そう踵を返して1歩2歩と歩き出したときだった。

「dいうさyぢうしうさでいdkjk.jk」

「kさjどsdじゃjkあdjkhjdだsdsjsakj」

「カskldjklさjかjkあjかj」

「・・いぢういおさ」

ん？いきなり騒々しくなったな。  
後ろを確認するために、再び踵を返す俺・・・・・・・・360度回って  
何がしたいんだろう俺は。

なんとあの美人Aが喚いていた、大声で。なんとまああの美人Aが  
叫ぶとは、いったいなにか？

深呼吸して、耳を澄まして・・・・・・・・

「・・uけなさいよ。さつき・・目a・・・・・・・・何っ無視し  
t・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・」

「おん・・・・・・・・u校の生徒でしょ・・・・・・・・早くも・・・・・・・・よ！」

ああ、やっぱりか。原因は俺か。さっきからかったのが良くなかったのかな。ていうか同じじ高校だとか個人情報の共倒れは勘弁してくれよ。てかよく分かったな高校同じって。まあ同じ高校、同じ学年なら顔くらい見覚え合っても不思議じゃないか。

「あのー・・・・・・・・知り合いなら助けたほうが・・・・・・・・・・」

いやいやいやいや、おばちゃん！なに戯けたこと抜かしてんだおばちゃん！！！！！！

あー、でもたしかに一応知り合いか。まあ、無関係以上知り合い未満の拙すぎる関係だけど。

## 第2話 ある日（後書き）

本編中の駄文は完全にノリで書いてます。

だから矛盾もあるだろうし、ネタもすぐ尽きるとおもいます。

なので無くなっても「ああ、ネタが尽きたか」と思っといってください。  
い。

読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4032ba/>

---

本音・建前・妥協と恋愛

2012年1月10日22時47分発行